

# 仙台文学館ニュース

第十一号

Sendai Literature Museum



## ことばとその周辺

第十回

仙台周辺で広く文学にかかわる活動に取り組んでいるグループを、紹介するコーナーです。

### 荒蝦夷・「仙台学」「盛岡学」編集室

「それぞれの東北」を書く  
プロフェッショナル。

「はい、アラエミシです」編集部  
滝沢真喜子さんが軽やかに電話に  
応える。聞き慣れない社名。名刺に  
は獲って喰われそうな迫力で「荒蝦  
夷」の筆文字。でも「仙台学」「別冊  
東北学」といえば、書店で見掛けた  
方も多いだろう。荒蝦夷はそれらを  
手掛ける編集・出版集  
団だ。ちなみにこの社  
名は、仙台在住の作  
家熊谷達也さんから  
作品名を譲り受けた  
もの。「東北」を二語で  
表すには、これしかな  
かった。



「仙台学」「盛岡学」はじめ各地の「学」。  
論文やルポから小説までジャンルは幅広い。



(左から)滝沢さん、土方さん、千葉さん

年二回発行の「別冊  
東北学」は、東北芸術  
工科大学(山形市)の  
赤坂憲雄教授を中心  
に発行されていた雑誌だ。長く東京  
を拠点にライターや編集者として活  
動してきた土方正志さんは、この雑  
誌に創刊から関わってきた。既存の  
民俗学などの枠にとらわれずに自由  
な発想で地  
域を見つめる  
「赤坂・東北  
学」に共鳴し、  
アカデミズム  
を踏み越える  
表現の場とし  
て創刊した。

「毎号必ず東北六県を網羅したが、  
そこからこぼれるテーマや興味深い  
素材もたくさんあると気づいた」と土  
方さんは振り返る。東北学プロジェ  
クト第一期五年間に八号まで刊行  
し、第二期がスタート。そこで、地域  
ごとに「のれん分け」するアイデアが  
生まれた。東北各地で地元の手書き  
たちが、それぞれの地域の「学」を編  
むのだ。

こうして誕生したの  
が、千葉由香さんが編集  
長を務める「仙台学」。  
「盛岡学」は滝沢真喜子  
さん、「会津学」「津軽学」  
「村山学」は、続々と姉妹誌  
が追いかける。  
大学の論文集や旅行  
雑誌などの取材・編集の  
受託を手掛ける一方で、  
東京時代に親交のあつ  
た編集者たちからは「東  
北の取材は任せ」と注文が途切れ  
ない。東北を隈無く取材してきた実  
績と、今や失われた風景も含む数万  
点もの貴重な写真資料の蓄積が高  
く評価されているのだ。  
「東京ではなく仙台にいなから、ク  
オリティの高い出版物を編集してい  
きたい」土方さんの静かな言葉を、独  
立した書き手、プロの編集者たちの  
誇りと聞いた。(下)

●問い合わせ先  
電話(022)2981-8455  
(有)荒蝦夷

## 学芸室日記

●本号の講演録で瀧名秀明  
さんが「僕も「ドラえもん」を  
描かせたら上手いですよ」と語  
っていますが、これは本号で  
す。トーク後のサイン会で、瀧  
名さんがサインの横に描き添  
えたのが、テレビでおなじみの  
キャラクターたちの似顔絵。  
サラサラと筆を走らせる姿に、  
一同「おっ」。科学から漫  
画まで、守備範囲の広い瀧名  
ワールドは魅力的です。  
ホームページによれば、瀧名  
さんはアメリカで飛行機の免  
許を取得、日本でも「今後、講  
演には自分で飛行機を操縦し  
て乗りつけてゆきたい」とのこ  
と。お待ちしています！



東北大学特任教授としてもアクティブ  
に活動している瀧名さんです

●仕事柄、文学者の書齋にお  
邪魔することがありますが、そ  
の文学者の知の宇宙を形成す  
る要素であると感じます。そ  
ういった多数の蔵書をご寄贈  
いただき、資料として収蔵し  
ている文学館は、考えてみると  
ひそかに「かなり？」エキサイ  
ティングな施設なのでは？  
今後、そんなこともお伝えで  
きればいいなと思っています。

●開館以来共に歩んできた井  
上ひさし館長が三月末で退任  
することになり、三月四日、館  
長として最後のイベントが開  
催されました。午前は友の会  
仙台文の会会員による「井上  
館長をかこむ会」、そして午後  
は「演劇の持つ力」と題する座  
談。会場は井上ファン熱気  
で汗ばむほど。「館長は退きま  
すが、これからは今までよりも  
気軽に来られると思います」  
「(館長退任は)ひとつの終わり  
ではありませんが、もうひとつの  
始まりなんです」との言葉に、  
会場からは大きな拍手が沸き  
起こりました。



演劇工房10-BOXの前工房長・熊谷盛さんと、  
東宮城野小学校校長・菅原康子さんを交え、お  
芝居の話に花が咲きました



「仙台文学館館長・井上ひさし」のラスト  
ショット。いい笑顔!

●夕方、館を離れる井上館長  
をスタッフがお見送り。花東

●館長のバトンを受け取るの  
は歌人の小池光さん。小池さ  
んは宮城県栗田町出身で、父  
上が直木賞作家の大池唯雄。  
歌集に「滴満集」時のめぐり  
に」などがあり、短歌の評論や  
エッセイでも活躍中。新  
館長を迎える仙台文学館  
に、変わらぬ応援をよろしく  
お願いいたします。

### 没後80年記念特別展



人間・芥川龍之介  
やさしかった、かなしかった。  
4月21日(土)  
7月1日(日)  
企画協力  
日本近代文学館・  
山梨県立文学館

## ひとつの終わりで、 もうひとつの始まり

仙台文学館の取柄の一つは「生きている」とい  
うことです。作っておしまい、という文学館では  
なかったという事は、大変素晴らしい。仙台  
の文化の高さだと思います。  
みなさんがここを自分の家みたいに錯覚して  
(笑)、ここに入り込んでくださっているというこ  
とが、この文学館を生かしていることにつながっ  
ています。今後とも、文学館を助けて、利用し  
てあげてください。

私は、今までも気楽に来られると思いま  
す。これからはむしろみなさんの立場に立って、  
もっと自由に仙台文学館と関わりたい。私は失  
言癖があるので、館長としては言ってはいけない  
ことも、みなさんと同じ立場になれば勝手に言  
えるわけです(笑)。そういうわけで、これから  
は違うかたちで、みなさんと一緒に、この文学館  
の命を消さないようにしたいです。  
昨日、学芸員のみなさんと雑談したのですが、  
財政を少しでも助けるために、私が一日そのへん  
に座って、生原稿を書いてお売りするとか(笑)。  
みなさんが高く買ってくださればいいんですけど  
(笑)。こんな館長としてはできなかったことを、  
これからはしたいと考えています。  
これは、ひとつの終わりで、もうひとつの始ま  
りです。せつかくの別れのセレモニーですが(笑)、  
今後とも、よろしく願います。

仙台文学館  
井上ひさし

(三月四日に行われた、仙台文学館友の会・仙台文の会会員  
による「井上ひさし館長をかこむ会」での挨拶から)

# 谷崎潤一郎『春琴抄』

最初の新人賞を戴いた八年前、新聞や雑誌のインタビュアーを受ける際に挨拶代わりに持参したのが、この一冊。谷崎潤一郎の初版本「春琴抄」だ。この本と出会わなければ「若合春侑」という一般には即座に読めない筆名を付けることも、作家になることもなかっただろう。

デビュー作「脳病院へまゐります」の冒頭で呼び掛けた男



「おまへさま」のモデルとの出会いをきっかけに谷崎の初版本蒐集を始めたのだが、この本は、当時住んでいた東京都世田谷区三宿通りの近所にある「三茶書房」という古本屋の老主人が取り置きしてくれたものだ（この件は「脳病院」に登場する）。今は亡き老主人は、実は古本マニアの間では有名だった方で、週の半分は神保町三宿隣りの店で、二階の稀覯本



コーナーに座っていらした。それを知らなかった私は三宿交差点そばの店に足しげく通い、千部限定愛蔵版「新譯源氏物語」、新書版全集、「おまへさま」に送る分と自分のための初版本を何冊も購入していたのだ。

谷崎の初版本は、芥川や太宰と比較すれば長生きしたことと発行部数が多いことで決して高価ではないのだが、「春琴抄」に限っては高価と廉価の両方がある。というのも、同じ内容でありながら「赤本」「黒本」に区別され、赤いほうは漆塗りの豪華装釘で、前に神保町で発見した時は五万円以上の値が付けられ、鍵付きガラスケースに収められていた。見事な朱

の漆色だったが、本間に桐などの綴じ板に漆が塗ってあるのかどうか、触ったことのない私にはわからない。私が所蔵しているのは「黒本」で、光沢のある黒い厚紙に金色の毛筆で題字と著者名が記されている。落丁や破れや大きな汚れがないのは幸いだったが、箱もなく、随分と草臥れていたため、確か五千円だった。私は驚喜して老主人に礼を言い、迷わず購入した。

谷崎の装釘への思い入れは強く、紙や挿画、奥付の印も凝っている。そればかりか「自筆本」というものもある。朱や墨での訂正と推蔽が入った原稿そのものを同じ谷崎専用の原稿用紙に印刷して桐板で綴じており、収める箱も豪華絢爛だ。

十二年前、「少将滋幹の母」は十五万円、「蘆刈」は三十万円だった。「少将」は「おまへさま」が買い求めるといいうので私を手配したが、原物に触れれば欲しくなるのは自然の摂理。貧乏な癖に「蘆刈」が欲しくて、欲しくて、どうしても欲しくて、経歴に書けない破廉恥な仕事に就こうとしたほどだ。職業に貴賤はないとはいえ、いい加減に目を覚ませ」と家族に諭されなかつたら、今頃、私の過去の汚点となっていたかも知れない。

前置きが長過ぎた。そう、「春琴抄」から「若合春侑」の「春」を「す」と読ませるアイディアを思いついたのだ。昭和八年発行ならではだるうが、この本には字崩し仮名が混ざって印刷してある。例えば「志か」「楚れ」「登ころ」「津ける」「古と」「奈良ない」「毛し」などの漢字部分が草書体で「春る」と書いて「する」。漢和辞典を繰りてみれば確かに「す」と読む。これは面白い、と戯れに筆名を付けたの



谷崎潤一郎『春琴抄』初版本（創元社 昭和8年）

は、小説など一行も書いていなかった頃。書道の「字崩し仮名事典」で草書体を読み解いた私は、官製ハガキで「春琴抄」初版本専用葉「なるものを二枚作成し、出来の良いほうを「おまへさま」に送った（この件も「脳病院」で使用）。「春琴抄」は、何度繰り返し読んでも飽きない。段落や句読点が極端に少ないにも拘らず、音読しても息切れのしないリズム感、鮮やかに迫り来る情景、下世話なほど生々しく繊細な描写や設定、

語り手の声も聴こえそう。いや、実際に聴こえる、会ったこともない谷崎の声が。憧れた、ひたすら憧れた。いつか、こういう小説を書いてみたい、と強く思った。

そこで書いたのが、谷崎の若い時分なら発禁処分となつたに違いない、過剰で過激な内容のデビュー作「谷崎へのオマージュ」と評した人に対しては、「尊敬」という意味では同意するが、谷崎の足元にも及ばない原始的な足掻きに過ぎないシ

ロモノだ。新人賞の「受賞の言葉」では憧れの気持ちそのままに「春琴抄」を目指したい」と書いた。しかし、新聞で酷評された。小説の内容へは一切触れず「受賞の言葉」に対して憤慨していた。後になって、その評者に「あの時、どうして、あんなにボロクソに叩いたんですか？」と尋ねたら、「だあって、気に入らなかつたんだもん」と返ってきた。えーとと驚きつつ、妙に納得した。彼は谷崎が大好きで、彼の中には「こんな新人に

谷崎がわかってたまるか」という「自分だけの谷崎さん」が出来上がっていたのだ。

今回、このエッセイを書くにあたり、久しぶりに手にした「春琴抄」。私だけの谷崎さんはまだ完成していないが、やっぱりすごい。昭和の大きな戦争を経て、七十年余りが過ぎてきた、貴い価値を持ち続けるこの初版本のように、私の本も長生きしたいなあ、と心底から憧れる。



若合春侑（作家）  
1958（昭和33）年、宮城県塩釜市生まれ。1998年、「脳病院へまゐります」で第86回文芸学界新人賞を受賞。同作および「カタカナ三十九字の遺書」「掌の小石」が芥川賞（第119回～121回）候補作となる。2002年、「海馬の助走」を受賞。他の著作に「世間様かくありき」「無花果日誌」「蛸」がある。



## 押川春浪の写真

本多 真紀（仙台文学館学芸員）

三人の青年が固く手を握りあって写っている一枚の写真。青年たちの名は右から押川春浪、永井荷風、黒田湖山。撮影時期は明治三十四、五年と推定される。この頃三人はともに二十代前半で、小説の道を歩みはじめたばかりであった。

なかでも押川春浪（本名：方存）は、東北学院の創設者・押川方義の長男で、幼少期を仙台で過ごした人物である。野球に熱中しすぎて学業を怠る、乱闘事件を起こすなど何かと人騒がせな少年だったが、明治三十三年、文壇デビュー作となる『海底軍艦』を執筆し、出版の売り込みのため作家・巖谷小波のもとを訪ねた。そこで春浪は小波が主宰する文学サークル「木曜会」に参加し、荷風と湖山に出会うのである。のちに荷風は「耽美派」と称され、湖山は新聞業界に進み、そして春浪は冒険小説・SF小説の先駆的な作品を残すなど、それぞれに個性的な活躍を成した三人が、若き日にこの写真のように厚い友情で結びついていたことは興味深い。とくに春浪は荷風と

親しく、二人で花街に遊ぶこともあった（『荷風全集』第二巻の巻頭にはこの写真が掲載されている）。だが、その親交が断絶した時期もある。あるとき、荷風が知人と銀座のカフェ「プランタン」に立ち寄った折、春浪一行を見かけたが、泥酔状態のため側を避けて二階に上がったところ、春浪が来て荷風たちを罵倒し始めた。間もなく春浪の連れれの男二人も加わって傍若無人に振る舞うので、その後荷風は春浪と絶交状態になった。大正三年、春浪

が三十八歳の若さで亡くなる前に関係は回復したというが、春浪の破天荒ぶりを示すエピソードのひとつである。

春浪に関しては、父と母に断酒を誓った血判状などの資料も残されており、作品同様にユニークな人物像をのびることができる。

春浪のデビュー作『海底軍艦』（明治33年 文武堂）

# 「科学と小説の翼を持つて」

## 科学と小説は遠くはない

今日は科学と小説の話をするんですが、おそらく多くの人には、それってすごく遠い世界の話だと思ってるんじゃないでしょうか。ただ僕はあまりそうは思っていないで、できれば僕のような考えを読者の人と共有したいなと思いつつ書いています。

僕は東北大学の薬学部を出たんですが、父親もやはり薬学部で、静岡県立大学を経て今は中部大学でインフルエンザウイルスを研究しています。

母親は父の薬学部の同級生。すごく小説が好きで、僕が子供の頃は家の中に早川書房のポケットミステリのアガサ・クリス



ティがほぼ全巻揃っていましたね。他に、仁木悦子さんと夏木静子さんを、母はよく読んでいました。

このような両親の影響か、僕は自身は小説も科学も好きで、週末にはよく図書館に行って本を借りていました。マンガも好きでね、今回の展示(注:読書サロン「仙台の作家たち」にも藤子不二雄(注)さんからいただいた色紙がありますが、僕も「ドラえもん」を描かせたら上手いですよ。そんな子ども時代を送って僕は薬学の道に進んだんです。

東北大学時代、恩師で今は星薬科大学で学長を務めているらっしゃる南原利夫先生は、折にふれこうおっしゃってました。「薬学とは雑学である」と。

「薬学というのはいろんな分野につながっている。いろんな分野につながりながら専門を深めていく。だから教養と専門の両方をやっていると良い薬学研究者にはなれないよ」というような意味なのではと思うが、それはいまだに僕の小説の書き方になってるんじゃないかなと思

います。

だから、僕は薬学部出身ですけれども、薬学の話ばかりを書くわけじゃなくて、やはりそこから人間の人間らしさとか、生命の根源とか、そういうところを超えていくような面白さがあるというふうなふうに考えているわけです。そんなわけで、僕の出す本って、よく分からないと言われるんですけども、自分の中では一貫しているんです。

## 分かる／分らないと境界知

NHKの課外授業「ようこそ先輩」という番組に出演して、母校の小学生を相手に石のことをテーマとした課外授業を行ったことがあります。この模様は「瀬名秀明 奇石博物館物語」という本にもなっています。

その時の授業でのことなのですが、子どもたちが「これ面白そうだな」と興味を持つような石はわりと専門的な石が多くて、子ども向けの図鑑には載っていない。やはり大人向けの専

門的なものをちゃんと子どもにも用意してあげることがすごく重要だと感じました。簡単な方が良い、分かりやすいというわけではないんですね。

よく編集者からは「読者にも分かるように、もっとやさしく書いてください」と言われるんですが、私はそういうのに反発するタイプでして、いやいや、難しいっていうのが面白いんだ、面白いと思う人は付いて来られるから大丈夫、とか言い返すんですが、ときどきくじけそうになることがありますね。読者が十人集まって、九人までの人から「難しかった」なんて言われてしまう。

ここに取っ出したこれは今日ようやく出た本、「境界知のダイナミズム」です。これも確かに難しい本なんですけど、今まで書いた本の中ではこれが一番の傑作だと自分では思ってるんですけど、小説ではないのであんまり読まれないと思います。

この本は、岩波書店の「フォーラム」共通通知をひらく」というシリーズの一冊です。共通通知とは

うって。

また、僕はよく巻末に参考文献の一覧を載せます。「BRAIN VALLEY」の時には二十六ページも割いたので、評論家の人からいろいろ言われてしまいました。そんなページ稼ぎをして定価を上げるくらいだったらもう少し話を絞れ、とか。

でも、文献は何かを調べるためだけにあるんじゃないんです。サイエンスをやっている人もそうでしょうけれど、文献を読むということは生活の一部だったり、生きていく様の一部なんです。

僕は、小説の巻末に参考文献が載っていたりするとすごく喜ぶタイプで、作家がどういう考え方とか生き方での本を書いたのか、何に着目して何に着目しなかったのかについて想像することがすごく好きです。それが一つのエンターテインメント、娯楽なんです。

共感(シンパシー)と感情移入(エンパシー)というよく似た言葉があります。シンパシーは、例えば私とあなたの心が一緒になったような状態、一緒に感じられるような状態。一方、エンパシーは、一歩それよりも能動的な感じがします。「あの人の立場は理解できる」という状態。

たきつけはいろいろあるんですが、僕は一時、大学の看護学部に勤めていたこともありまして。看護学生が病院に行くと実習をしますね。そうすると、今まで座学で勉強してきたことがなかなか現場では通用しないので、非常に悩んだりすることがある。そういう時に何かアドバイスをしてあげられればいいんだけど、僕は薬学出身ですし、なかなかそうもいかない。では、どうすればいいのか？

またそれから、文系、理系ってよく言われますけれども、文系理系とかあんまり関係なく、面白い小説を読めればいいのになと思う時があるんですけども、そういう話が通じない時があります。

違和感というものはない方がいいんだろうと思っていた時期もあるんですが、違和感がちゃんとある人の方が実は小説も面白く読めるだろうし、人との関係もいろんなことを工夫したりしながら自分を広げていけるだろうし、そういう人と、何か小説とか科学の面白さを共有できるような本をつくりたいなとずっと思っていました。

## 脳を存分に働かせて楽しむ小説

僕は「パラサイト・イヴ」からいくつか科学系の小説を書いた



んですが、他の人とちよつと違うことをやりたいな、サイエンスの話だけじゃない、文学の話だけじゃない、もっと何か違うことをずつとやりたいな、そういう世界を自分でひらきたいなという気持ちはずつとあって、でもあくまでもエンターテインメントですから、あまり何も考えなくても娯楽として読めるものを、とそれぞれの小説の中で、「前回はどうだったの、今回はこんな風に」と試してみようというふうなやり方ではないかと思えます。

例えば、科学の小説を書いている人で、マイクル・クライトンというアメリカの有名な作家がいます。「ジュラシック・パーク」の作者です。

この「ジュラシック・パーク」は確かに科学の小説なんですけれども、科学の面白さと面白さとを、全く違うところで書いているんです。

「どうやって恐竜を現代によみがえらせるか」という部分が「科学の面白さ」なんです。だけどその後の、恐竜が暴れてさあ大変、という部分は、実は古典的なアクション小説です。小説のフォーマットにのっとっているんです。

このように、小説の面白さと、科学の人たちが読んだ時のアイディアの面白さを、全く別にして相容れることなくきちんと分けた上で小説を書くのが、マイクル・クライトンのやり方です。そしてこれは、他の多くの作家のやり方でもあるわけです。

それはそれで面白いですよ。面白いんだけど、他にもやり方があるんじゃないかと、僕は考えているんです。科学の面白さと小説の面白さ、テーマと状況とキャラクターと感動を一つにしたいと思ってるはずとやってきています。

例えば「BRAIN VALLEY」という小説であれば、内容だけではなくて構造も脳みらいな感じにする。「デカルトの密室」は人間の自我問題がテーマですが、これを読んだ人が、そういう自分の心の状態を、「え、心ってこんな風になってくるのか」と驚くような感じに書く。普通、小説家っていうのは、そういうことはしないんですけれど、まあ、一人ぐらいはそんな人間がいてもいいだろ

## 瀬名秀明



瀬名秀明・橋本敬・梅田聡「境界知のダイナミズム」2006年12月 岩波書店

岩波書店がつくった言葉だと思いませんか、つまりコンセンヌス、常識という意味です。「文理の壁を越え様々な知の成果を結集し新たな知をひらく」とソデのところに書いてありますが、北陸先端科学技術大学院大学で言語の進化に取り組んでいる橋本敬さんと、慶應大学の脳科学者、梅田聡さんとの共著です。

どんな内容か。僕たちは人と話している時に、「なぜこの人こんなに僕が言っていることが通じないんだろう」「なぜこの人こういう風に考えるんだろう」というふうに、違和感を持つことがあります。じゃあ、なぜそのような違和感を人間は持つのか、ということを脳科学と言語学と社会学の話で書いた本なんです。

小説ではシンパシーで感動させる場合が多いですね。作者と読者がどつぱりと同じ感情に浸る。これはこれでカタルシス効果があるんですけども、せっかく人間の脳にはいろんな働きがあるのだから、読んで感動した、感激した、共感したという以外にもいろんなやり方がある。みんなが同じやり方である必要はない。ここ仙台でちよつと他の作家とは違うことをやってみてみたい。書き手と読み手が脳の働きを存分に発揮できるような小説、エンパシーで感動させるような小説が書ければいいなと思っています。

※平成十八年十二月十七日の講演から抜粋・要約したものです。



瀬名秀明 作家。東北大学機械系特任教授(SF機械工学企画担当)。1968(昭和43)年、静岡県生まれ。東北大学大学院薬学研究所博士課程修了。薬学博士。1995年、「パラサイト・イヴ」で第2回日本ホラー小説大賞受賞。1998年、「BRAIN VALLEY」で第19回日本SF大賞受賞。「八月の博物館」「虹の天象儀」「あしたのロボット」「デカルトの密室」等の小説の他に、科学分野の著書として「小説と科学 文理を超えて想像する」「ミトコンドリアと生きる」「ロボット21世紀」等がある。科学の専門知識を駆使した小説はホラー・ファンタジー・SF・ロボット小説などの多くのジャンルにわたり、壮大な物語と圧倒的な筆力には定評がある。最新刊は「境界知のダイナミズム」。仙台市在住。

# 戦後東北初の総合文芸誌『東北文学』

渡部直子(仙台文学館学芸員)

## 『東北文学』誕生

戦後、仙台から東北初の総合文芸誌『東北文学』が出版された。発行元は明治三十年創設の「河北新報社」。昭和二十一年一月から二十五年五月まで、合併号を含め全四十七冊、通巻五十三号を数える。

戦時中、戦争遂行協力体制のために結成された日本文学報国会が、昭和二十年九月に解散。翌月、仙台に在住していた日本文学報国会の地方会員の間で、新しい会を設立して東北の文芸活動を振興しようとの話がまとまり、昭和二十一年一月東北文芸協会が発足した。これらの動きを背景に『東



『東北文学』創刊号

私はそれは刺激剤にはなるかも知れないが非常に間違つた考へではないかと思ふ。われ／＼の文学運動などもどこまでも地方から盛り上るといふことが本当ではない

北文学』は創刊された。編集は宮城に疎開していた作家の日比野士朗、劇作家の久板栄二郎、河北新報出版局の村上辰雄、宮崎泰二郎らがあつた。

## 『東北文学』が目指したもの

「新文学の模索」(一巻二号)の舟橋聖一、桑原武夫、日比野士朗の鼎談で、その目指す方向が示されている。「東京から地方に作家が入つて来た。もう一つは従来発表はされなかつたが、東北自身がさういふ無名作家を沢山持つてゐる。(中略)中央から文化人が流れて来るから、地方の文化が栄えるやうになる。(中略)併し

私にはそれは刺激剤にはなるかも知れないが非常に間違つた考へではないかと思ふ。われ／＼の文学運動などもどこまでも地方から盛り上るといふことが本当ではない

## 特集号 太宰治・菊池寛

一巻十一号には、太宰治が、戦争末期甲府から青森に向か

かと思ふ。(中略)われわれが結束して地方に火をつけて地方の若い人達に立ち上つてもらはうといふことを一応考へてる(日比野)。同誌には戦火を逃れた疎開作家をはじめ、大池唯雄、濱田隼雄、東野辺薫、草野心平、白鳥省吾、阿部みどり女、佐藤佐太郎といった地元東北の文学者らの作品が掲載された。また中村武羅夫「自伝的文壇五十年」の連載、東北大学に赴任していた桑原武夫、徳永直らの評論の他、各地で結成された文学協会の動きや出版雑誌についての紹介、東北在住の作家の住所を掲載し、互いの交流を促している。そのような内容から、疎開作家等の力を借りて新人の発掘、育成につとめ、東北から新しい文学、文化を発信したいというのが『東北文学』の大きな目的だったことがわかる。



左端が編集を担当した宮崎泰二郎、隣は作家の東野辺薫

れている。時代の寵児であった菊池寛の戦後の評価を知る貴重な文献の一つになっている。

## 新人発掘に力を入れる

戦時中、作家は戦争協力の名のもと自由な創作活動を制限され、戦後はどのような立場で作品を発表するのか、その去就が注目されていた。『東北文学』では「既成作家といふものは今の混乱と危機に際して、どういふ風に身を処するかといふことを考へてゐる。戦争を見送つてしまふか、真つ向から受けとめるかと、ジャーナリズムといふことも考へるだらうし、職業意識がどうしても出て来ると思ふ。さういふ意識なしに思ひ切つて書けるのは新人ぢやないかと思ふ。(中略)若い人なら真つ向から何かはつきり書いて行くんぢやないかと思ふ」(一巻二号 日比野士朗「新文学の模索」)との発言にあるとおり、新しい文学の担い手として、まささらな新人に期待を寄せている。「20代の若い人々による小説作品を公募します」(二巻十一号)と呼びかけ、限られた誌面を割き、集まった優秀作品を順次掲載し新人育成に力を入れた。三巻十号で農民小説の新人として紹介された秋田の千葉治平は、後日「虜愍記」で第五十四回直木賞を受賞し

ている。

一方で、「今日の文学」(三巻一号)と題した、井伏鱒二、舟橋聖一、丹羽文雄、河上徹太郎、日比野士朗ら全員四十代の中堅作家による座談会では、世代間における文学観の違いが話題になり、若い世代が槍玉に上がっている。丹羽は「僕等は先輩にかみつく時でも、僕等は先輩のよき、恐さというものを知つてゐる。ところが今の二十代になると、てんでそれがない。先輩や古い大家のものをよく読んでない。今の若いものが文学として考へてゐるものに何か大きなものが不足しているんだ」と手厳しい。日比野はそんな風潮を認めながらも、若い世代は、自分たちの文学を作るため、既成の文学を打ち倒さなければいけないという気持ちで、どう方向付けていけばいいのかわからないだけで、その姿勢は真摯なものだと弁護している。混沌とした文学の行方について問題提起がなされていて面白い。

## 役目を終えて

五年目を迎えた『東北文学』では、世界文学の動向や戦争文学の特集、ベテランから新人までを同じ組上に上げ、匿名で辛口批評を試みる創作月評など刺激的な企画が始まってい

た。しかし昭和二十五年五月、突然の休刊宣言が出される。劣悪だった出版状況が好転し、中央からの出版物が増えたためであった。また地元でもそれぞれの分野で専門誌が出版され、軌道に乗ってきたことも大

きな要因であつたらう。「終戦五年目の客観事態に照らしてみても、既に一つの役割を果し得た感が強いのであります」とある休刊の挨拶には編集陣の強い自負が感じられる。戦後の混沌とした時期に一地方都

市から発信された『東北文学』の求心力は測りしれず、文化の種をいくつも育てた功績は決して小さくはない。

## 文学のある風景

### “サーカス市場”は、どこだ？

「“サーカス市場”なんて実在しませんからね」一番町のアーケードを足早に南へ向かいながら、三浦明博さんはキッパリと言った。

昨日までの暖かさとは打って変わって冷え込んだ晩。アーケードから枝分かれした薄暗い路地裏の奥に潜り込み、あちらこちらと背景を替えたり、表情や身振り手振りに注文をつけたりはしたが、「怪しいロケ」はものの20分で切り上げにした。何しろ寒かったし。

今回の「文学のある風景」は、三浦さんの近著『サーカス市場』を髣髴とさせる界限を訪ねて作者自身が逍遙する様子を撮ろうという(何ともユルい)企画だ。「せっかくこの時間に、この界限に来たのですから」「まあまあ、何か温かい飲み物でも」、撮影が済むと直ちに三浦さんが知っている店へ。阿吽の呼吸、むしろ予定調和、正確には計画的犯行か。

「サーカス市場と呼ばれるこの小路は、戦後の闇市時代から連絡とつづくといわれる。ある意味由緒正しい飲み屋街だ。」(『サーカス市場』より)

●アクセス：今回は秘密です。掲載した写真はあくまでもイメージです。「サーカス市場」とは何ら関係がありません。「サーカス市場」を探し回った結果いかなるトラブルに巻き込まれようとも、三浦明博さんおよび仙台文学館は一切の責任を負いかねますのでご注意ください。



「飲み物を出かけるときも、表通りや目抜き通りより、ちょっと横にずれた裏通りや小路にひかれてしまう」

「しばらくぶりだなあ」と三浦さん。筆者とは同学年と分かると、一回り以上若い仙台文学館職員の方たちを尻目に昔話は異様に盛り上がった。

「というわけで、“サーカス市場”は実在しないんですからね」店を出てそれぞれの家路に分かれようという時、三浦さんはもう一度念を押した。あれ、足取り



「この奥に商店街の事務所があった。戦時中に練習機の格納庫だった建物を移築したらしい。今でもあるんだ」

「そういえば初めて借りた事務所もいかがわしい場所の、胡散臭い建物の中に。もしかすると、そういう場所が好きなかも」

